平成 18 年度　8020 公募研究報告書抄録

研究課題：高齢者の口腔内感覚と唾液性状が嚥下機能に及ぼす影響に関する研究
研究者名：柿木保明
所　　属：九州歯科大学生体機能制御学講座摂食機能リハビリテーション学分野

高齢社会の到来により、高齢者における疾病構造も変化してきており、とくに要介護高齢者では、服用薬の副作用や生活行動の変化により、口腔乾燥を来していることが多い。そのため、咀嚼機能や構音機能などの口腔機能や嚥下機能の障害される例もみられる。

そこで今回は、口腔内感覚と唾液の性状に関する基礎的検討として、研究１として、舌粘膜の２点弁別閾と唾液の曳糸性の関連性について調査研究を実施し、研究２として、臨床的検討から口腔乾燥度と自覚症状および嚥下困難感の関連性について調査研究を実施した。

研究１：舌粘膜の２点弁別閾と唾液の曳糸性の関連性

被験者は、全身疾患を有しない健康な学生 22 人とした。年齢は、18 才から 42 才で、平均 23.5 才、性別では男性 11 名、女性 11 名であった。対象者に対しては、唾液の曳糸性（安静時唾液、刺激時唾液）と舌粘膜標準部位における２点弁別閾を調査し、それぞれの関連性について統計学的に解析した。

その結果、安静時唾液の曳糸性は、刺激時唾液の曳糸性に比べて、有意($p<0.002$)に高いことが認められた。また、舌の部位ごとの２点弁別閾値は、舌尖部が 0.66±0.33㎜ と最も小さく、前方部舌縁、舌背中央、後方舌縁の順で有意に高くなり、後方舌縁では 6.6+3.8㎜ と、舌尖部の約 10 倍を示した。唾液の曳糸性と 2 点弁別閾値との関連では、刺激字唾液の曳糸性と前方部舌縁部における２点弁別閾値との間には有意($p<0.01$)の相関がみられ、刺激唾液の曳糸性が高いほど舌尖右側舌縁の弁別値が小さくなった。研究２：口腔乾燥度と自覚症状および嚥下困難感の関連性

対象は、当科および歯科医院、病院歯科等の受診者ならびに病院,老人保健施設などに入院入所している患者のうち、本調査に同意の得られた 428 名とした。対象者には、口腔乾燥に関連する問診のほか、臨床診断分類、唾液湿潤度検査、口腔水分計による評価を行った。これらの評価と測定は、原則として朝食後 2 時間以上経過後の午前 10-12 時とし、水分摂取から 60 分以上経過していることを確認して行った。

その結果、口腔の乾燥感は、年齢が上がるにしたがって自覚者の割合が高くなることが認められ、高齢者群では非高齢者に比較して有意に高かった。臨床診断基準は、唾液湿潤度や口腔水分計の測定値とも統計学的な関連性があり、要介護高齢者などでは有効と思われた。嚥下困難感については、口腔乾燥感のある者では 28.1%と極めて高い自覚率を示し、軽度を入れると 45.6%を占めていた。口腔のべたつき感についてみると、高齢者群にべたつき感を自覚する者が多く、18.5%で、軽度を入れると 38.8%を占めており、非高齢者群に比べて有意に高い結果であった。べたつき感と嚥下困難感との関連性についてみると、べたつくと回答した群では、41.9%が嚥下困難感を有し、軽度を含めると 56.4%と半数を超える結果であった。べたつき感と湿潤度との関連性についてみると、舌上 10 秒法の湿潤度の結果では、べたつき感のある者では、有意に低下していることが認められた。

以上から、口腔内感覚と唾液の物理的性状、嚥下困難感の間には関連性があることが示されたことから、唾液を指標とした検査値により、口腔内感覚だけでなく、口腔機能や嚥下機能との関連についても重要な情報を得られる可能性が示唆された。また、べたつき感と唾液の曳糸性についても関連が示唆され、唾液の物理的性状の把握も今後、重要になると思われた。とくに、高齢者では、口腔内感覚と唾液の物理的性状を正常にすることは、口腔機能向上および誤嚥性肺炎予防の観点からも、重要であると思われた。